

中央分水嶺踏査（野反湖～三国スキー場間）山行記

（ J A C No 1 3 1 7 6 ）日本山岳会 つくも会 芦澤敏夫

日本山岳会創立100周年記念事業中央分水嶺踏査では、つくも会として割り当てられたコースとして新潟・群馬県境の三国峠から稲包山、白砂山を越えて野反湖までとなった。途中、稲包山から白砂山までは登山道が無く、登山地図にも「白砂山～稲包山国境稜線は猛烈なヤブ 大学ワンゲル部のヤブこぎ合宿の世界」と記載されており、水場も無いため相当困難な縦走が予想された。また、分水嶺説明会の折にも、体験されたと思われる方が、「あの辺は、藪がひどいし熊も出るし、鉄砲でも持っていかなければとても危険で行かれない。」と言っているのを耳にした。

今回、私がつくも会の分水嶺担当の指名を受けたが、いかにより多くの会員の方々の参加をいただき、この困難なルートを攻略するか、という難題に、取り組むことになった。

それにしても、「ルートの概要を下見に行こう。」と3月に徳永代表以下4名で、三国峠からのコースを試踏したが、雪の状態や天候不良のため、目標の稲包山までは程遠いキワノ平の頭手前でテント泊し、撤退を余儀なくされた。

その後、4月の例会にて協議を行い、いかにこの困難なルートを克服するか、藪漕ぎ経験者の皆さんの知恵を頂いたが、やはり水の確保が困難 藪がひどいとのことから、積雪時又は残雪時が適当ではないか。あるいは、夏に少人数・軽装備で短日数で駆け抜けるか。また、エスケープルートを考えて、野反湖から入山し、白砂山を経て、稲包山の手前三坂峠から三国スキー場へ下った方が良いのではないかと、この意見があった。ということで、とりあえず残雪期である5月の連休を使い、野反峠から白砂山までを踏査してみることにし、状態が良ければ三坂峠を目指し、行ける所まで行ってみるとの了承を得た。

実行に当たり、何人かの会員に打診をしたが、いずれも連休はスケジュールがふさがっていたため、とりあえず単独にて、危険回避をしながら可能な所まで、踏査することにした。なお、当然単独であれば、遭難、事故等のアクシデントが予想されるため、通常の冬山装備に加えて、非常通報用の無線機、GPS、発炎筒、カプサイシン（熊よけ）スプレー、鈴、ホイッスル等のアクシデント対策グッズも携行することにした。

以下は、その記録である。

山行中の主なコースタイム（着、発時刻）

2004年5月1日（土） 野反湖（登山口）5:30 7:15 地蔵峠 7:15 10:25 堂岩山 10:40
13:00 白砂山 13:55 16:33 上ノ間山（泊）
5月2日（日） 上ノ間山 5:40 8:51 忠次郎山 9:05 10:45 上ノ倉山 10:55
11:23 大黒ノ頭 11:23 12:10 ムジナ平 12:10 12:38 セバトノ頭
12:38 16:30 1820m地点（泊）
5月3日（月） 1820m地点 6:25 6:57 1563m地点 6:57 9:28 三坂峠 9:47
11:10 三国スキー場

2004年4月30日(金)

仕事から帰り、夕食を済ませて飼い犬のミミの相手と家内にパソコンを教えていたら

21:30と、出発が遅くなってしまった。東京環状8号線では、ゴールデンウィークなのか工事中なのか大渋滞。やがて、関越道に入ると今度は順調に渋川・伊香保まで進む。一抹の不安と決意をもって、一路野反湖へ急ぐ。カーナビ頼りの野反湖畔。白砂山登山口の駐車場を確認。駐車場には約10台の駐車と1張りのテント(?)。到着は2時43分。夜明けも近いが、酒を1合あり早々に仮眠をする。

5月1日(土)

4時30分 廻りが白々としてきた。車外には、車が増えて20台位になっている。皆釣り客のようである。登山者の様子はない。軽い朝食、トイレを済ませ、支度をする。天気は、霧が少し山にかかっているが、全体的に晴れている。しかし、2時間位の仮眠では眠い。だが、ここで寝ている訳にはいかない。5:30出発。テント泊の冬山装備に5日分の食料の入ったザックが、ずっしりと肩に食い込む。登山届けを出すところが見当たらず、仕方なく車内に書き置きをし、出発する。登山口から、すぐに雪渓にて、先が思いやられる。

しばらく行き、残雪の急斜面となったため、アイゼンを装着。左下50m位の急な斜面をトラバース。ゆっくり、慎重に、不明瞭なトレースをたどる。やがて、後ろから2人のパーティーがアイゼンを付けずに、軽装備で追い越して行く。当方は、荷物が重く、スリップしたら事だとアイゼンを付けたままゆっくり歩く。やがて沢を渡り、本格的な登りとなる。今回つくも会で共同購入したGPSも順調に辿っている。地蔵峠にさしかかると、尾根に出て、風が強い。後ろから佐武流山へ行く年配ご夫婦の2人組に抜かされる。コースはところどころ雪。アイゼンを装着のまま、藪はない。道は、比較的明瞭であり、あえぎながら登る。そのうちに、堂岩山が見えてくる。しっかりした山である。予め設定した、いくつかのGPSのポイントを過ぎ、堂岩山山頂にたどり着く。山頂からは、登ってきた野反湖、これから行く白砂山が一望できる。遠くには、浅間山であろう峰峯が遠望できる。天気は、快晴となる。山頂では、この景色を独り占め。ここに留まりたい気持ちを抑えて、先を急ぐ。一度下って、3つのピークを通り、13時白砂山。結構疲れた。山頂は残雪のため、三角点の確認が出来ない。標識も不明瞭である。

ここで、持参したスコップの柄の部分をとってきたことに気がついた。山頂では、若者が一人八間山から登ってきて野反湖に下山すると言っているのでもし下山で気がついたら車のそばに置いてほしいと依頼。そうこうしていると、左の尾根を佐武流山から一人の登山者が来た。昨日は、山頂付近でテントだったとのこと。藪は、思ったより少なかったとの話を聞き、期待をし、いよいよ困難なルートに足を踏み入れる。白砂山からは、藪がひどいとされているが、ときどき藪が出てくる程度で、雪に隠れてたいしたことはなく、むしろトレースが無いために、コースをはずさないように注意する。しかし、稜線上は、天気がよく360度の景観を楽しみながら、残雪の上に初めての足跡を残す。アイゼン、ピッケルでバランスをとりながら進む。やがて、藪と雪が交互に現れるようになる。稜線は、藪だが、少し下には下がった雪庇が残る。雪庇もところどころ雪崩れている。慎重に雪庇にのり、危険箇所は藪を進む。すると、200m位先に雪庇が

崩れ、登山者らしき人が滑落(?)した。まだ、上部からは雪と岩・砂が崩れている。悲鳴は聞こえなかったが、少し回転をしながら、急斜面で止まって、うつ伏せで手を振っているようだ。

「大丈夫ですかー？」と大声をかけるも遠方で届かないのか、返事なし。どうしたものか。上には、人気がない。単独行者だろうか。「登山者ですかー？」

「大丈夫ですかー？」と声をかけるも、返事が無い。見捨てる訳にもいかず、当方からも、急斜面を下らねばならない。ここから、無線で救助を呼ぼうか、それとも少し近づいて、様子を伺おうかと思案した。携帯は?とやってみるが、やはり圏外でつながらない。しかし、傾斜角40度位で、上部は雪庇、下は200m位の急斜面が続いている。こちらもしリッパすれば、二次災害だ。ヘリが来てホバリングするにしても平らな場所まで移動させなければならないので、ともあれ状況を確認するため、荷物を置いて、非常通報用の無線機のみを持って、降りることにする。慎重にトラバースぎみに下るが、もう午後の時間となり、雪が腐っているので、上部の雪庇が今にも落ちてきそうであり、滑落停止準備の体勢をとりながらゆっくりと下る。やがて、目視できる所まで降りると、なんとそれは人でなく、大木であった。ちょうど、枝が手足のようであり、回転をしながら滑落したのが、人に見えたのである。増してや、途中が太くなり、ちょうどザックでも背負っている格好に似ている。「なんだ。」と安心すると同時に、今度は自分がここで滑落し、後で誰かに発見されたら、なぜここを下ったかと疑問にもたれるだろうし、もしかすると自殺でもしたのかと誤解を招きかねないと思うとぞっぞっとしてきた。

上部の雪庇を見ながら、スリッパをしないよう、もと来た足跡を慎重に登り返し、やっとの思いで荷物の場所に戻る。なんてこった。ずいぶんロスをしてしまった。しかし、もし登山者の救助なんてやっていたら、それこそ今回の目的は達成されなかつたらうと、安堵しつつ先を急ぐ。今度は、自分があのように雪庇を踏み抜かないよう、注意しながら、ところどころの雪、藪をくぐりながら、やがて上ノ間山山頂にたどり着く。時刻は、16:33分。先を見るが、下ってもテントを張る場所は見当たらない。三角点を確認して、ここで今夜は泊まることにしよう。しかし、山頂のため、風が強くなることが予想されるので、近くの枝にテントをくくりつけ、今夜のねぐらを確保する。テントでは、雪を溶かして一人寂しい夕食であるが、重たい思いをして担ぎ上げた焼酎で、一人乾杯。「なんとかここまで来れたなー。」と一日を振り返る。しかし、明日が本番。藪の稜線を越えて、行けるところまで行こうと思いがつのる。テントの外は、風も無く静まり返り、月明かりで山並みが怖いくらいに浮かび上がっている。恐らく、この付近で泊まっているのは、一握りの人たちだろう。全山に向かって、就寝前の放尿。すっきりした。気温は、0度と比較的暖かい。水が凍り、明朝困ると思い、シュラフに入れるが、水は冷たい。やがて、睡魔に襲われ、今日一日の苦しかったことが脳裏をかすめる。風はないが、気温が下がってきた。うずくまって夜を過ごす。

5月2日(日)

やがて、寝返りに不自由を感じて目を覚ます。時計を見るとまだ2時。寒いので、もうしばらく潜っていよう。やがて、3時半。もう起きよう。気温は、0度のままである。テントから、外を覗くが、風も無く天気は良さそうである。早速朝食の支度と荷造りを行い、5:40アイゼンが効く凍った斜面を下りだす。下の方は、霧で見えない。GPSを頼りに、稜線を探しながらゆ

っくり下る。やがて、ぼんやりと見え出した稜線から、融けて一段下がった所に残雪があるが、ところどころ雪庇が雪崩れており、あまり外側を歩くのは危険なようだ。雪庇の下は、200m位雪の急斜面が続いている。かといって、稜線上は、藪なので、できるだけ雪面の方が、歩きやすい。稜線に近い雪面を歩いていたら、突然「ずぼっ。」と体が浮いた。腰までの落とし穴。背中の荷物は、持ち上がる。足は、どうにか地面についた。雪渓の空洞を踏み抜いたようだ。しかし、雪庇でなくてよかった。ザックをはずし、体を何とか雪の上に上げる。危なかった。しばらく行くと今度は、稜線の藪に足を取られ、進まない。増してや、痩せた稜線に木がかぶさって進めない。顔、体に藪・木が当たり、痛い。足で藪を蹴り、大きく足を上げて進む。この辺は、膝程度の藪なので、何とか超える。やがて、忠次郎山の直下の広い所に出るが、ここも雪が無かったら、藪がすごかっただろうと思わせた。

GPSを見ながら、ルートをはずさないように慎重に登る。霧も晴れて、景色が見えるようになってきた。このコースは、藪がなければ、素晴らしい景観なので、きっと良い登山コースになるだろう。

忠次郎山から、次のピークまでは、下りが雪で登りが藪。藪の登りはこたえる。やっとの思いで、ピークを越える。

次は、上の倉山への稜線であるが、ここは残雪が残り、とても軽快に歩ける。やがて、10:45 上ノ倉山山頂であるが、三角点は雪に埋もれて確認できない。霧が上がってきたので、先を急ぐ。大黒ノ頭までは、同じ稜線を行くが、だんだん藪と霧が濃くなってきた。大黒ノ頭に着くと、コースは90度右折をすることになっているが、霧のために下の尾根が見えない。GPS、地形図、コンパスで計算し、藪の中を下る。すると、すぐ下に雪渓が見えた。これからは、藪でなく雪の中を行けるのかと、ちょっと安心をして下って行った。すると、霧の下は、ただ急斜面が続くだけのようである。ちょっとおかしいなとGPSで確認すると、なんと別の方向に下山しているのではないか。しかし、廻りは霧で視界がきかない。GPSの示すとおり、もっと右へ急な雪渓をトラバースする。やがて100m位進むと、ぼやーと下に続く木立が現れた。本来の下りの稜線である。ここだと思い、近づくと、それは大変な藪であった。稜線上を進むのであれば、藪は比較的立っているのであるが、一度稜線をはずして、稜線に戻ろうとすると、急な登りの上、藪の正面から挑むことになり、また、稜線上は比較的藪だけで掻き分けられるのだが、稜線をはずした左右は、灌木が茂り、容易に稜線に戻れない。何とか、稜線上に体を上げ、やっと本来の藪の中に入ったかと思うと、不思議にも、藪の中に安心感を得た。また、しばらく行くと、今度は下りすぎている。廻りを見ると、自分の位置より左手の方が高いように感じる。早速GPSで確認すると、なんと今度は右の別の稜線に向かって下っている。「やばい。」また、稜線上に戻らなければ・・・、と同じ事を繰り返すこと7回。複雑に支尾根があり、霧に視界が閉ざされたコースを下山するためには、GPSが命綱であり有効である。それにしても、この藪はひどい。背丈を越す藪であり、密集している。ところどころ灌木が被い茂り、つるもからんで、藪も一定方向でなく、さらに、足元が見えないため、枯れた古木やつるにつまずいて、転ぶ回数。両手で掻き分け、足で探り、20mごと位にGPS、コンパスと地図でコースを確認しながら、慎重に下山する。ムジナ平を過ぎ、セバトの頭を越え、気がつけば、もう16:00。今夜の寝場所を見つけなければならない。それにしても、この藪ではテントも張れない。やがて、

下の方に平らそうな雪渓を発見。今夜は、あそこに・・・、と藪を漕ぐ手に元気が沸く。

16:30行ってみると、平に思った雪渓も、斜めの斜面でがっかり。それにしても、他に場所がないので、柄のないスコップで、出来るだけ傾斜がなだらかになるよう、設営する。今夜も、1820m地点雪の上。廻りは、藪。しかし、雪があったために、水は確保できた。フリーズドライの食料と、少し残った焼酎で、疲れも重なり早々の就寝。

5月3日(月)

夜中の2時頃、パラパラと雨の音。「藪で雨とは、参ったなー。」と夢の中。夢は、現実の職場の夢。何と上司と飲んでいる。「今日は何日でしたっけ・・・。」との問いに、上司は「何いっているんだ、今日は5月3日じゃあないか。」「ああ、そうですか。あれっ、そういえば、5月3日って藪の中にいたんじゃないか・・・。」で、目が覚めた。やっぱり、藪の中である。「また、今日も藪を漕がなければならぬのか・・・。」と現実に戻った。時計は、午前3時を指している。「今日は、距離的には今までより短いので、多少ゆっくりできるか。」と思い、うとうとすると4時である。天気が気になり、恐る恐るテントのチャックを下げると、何と真っ青な空が広がっている。良かった。早速、出発の準備を整え、「今日こそは、頑張っ藪漕ぎ地獄から生還するぞ。」との元気が沸いてきた。6:25 テントを畳み、また藪の世界へ突入する。足を取られ、顔をつつかれ、ザックがひっかかり、前に転倒、右へ左へ稜線はずさないようコースをたどり、GPS、地図、コンパスを駆使して、どうにか目的地に近づいた。

やがて、遠くの山に登山道らしき筋が見える。「あれは、きっと稲包山から三坂峠に続く稜線で道があるんだ。」「あそこまで行けば、この藪漕ぎも終わるのかな?」「じゃ、もう少しの頑張りだな。」と歩みを進める。

また、藪との戦い。ガサガサ、ぱりぱり・・・。稜線も右に左に曲がっている・・・。

灌木につまずいた。頭からすってんころりん。「いやっ、まいった。」「起きられない。」転んで足が宙に浮いている。荷物が重いので、思うように起きられない。足をばたばたしてどうにか着地。「あれっ?」突然藪を抜けて道に出た。「おかしいなー。登山道はもう少し先のはずなのに・・・。」GPSで確認してみる。やっぱり、100m位手前である。「きっとだれかが、登山道を延長して整備したんだ。良かった。」と歩いていく。やがて、9:28目的の三坂峠の道標。「やったー。」との思いもつかの間。「あれっ、ここから峠には左折するのじゃないのか?」よくよく考えると、三坂峠から三国スキー場へ下山道は、国土地理院の25,000分の1の地図には載っていないので、登山地図に記載の三坂峠から分岐しているものと勝手に思い込んでいたものだったので、峠から下山道があるものと思っていた。すると、またさっきの登山道が、実は下山道だったのかと納得し、またまた戻って登り返すこととなった。しかし、藪とは違い、道は明瞭。道標もある。実にありがたいものである。さっき出てきた藪の付近を通過すると、確かに赤テープが2本、目立たない位垂れており、やっぱりここが藪の入口・出口だった。

花開いた「ふきのとう」の群生地帯を下ると、やがて三国スキー場11:10。やっと人の住む世界に戻ってきた。春の香りがするアスファルトの道路を、てくてく、のんびり、ゆっくり歩いて、人ごみがする苗場スキー場バス停へ到着12:23。

それからは、越後湯沢、高崎、長野原草津口経由で、車を置いてある野反湖に戻った。

タクシーで野反湖の車に戻ると、落としたスコップの柄が何と、車の上に置いてある。白砂山の青年が見つけてくれたものだろう。住所も名前も聞かずに、お礼の言いようもないが、本当にありがたかった。今回の山行は、GPSが無かったら、道迷いや別の尾根を下っていたと、GPSの有効性と達成感を胸に、一路帰途についた。

今回の山行を振り返って、GPSには歩いた軌跡が残されており、遭難救助(?) 尾根はずし等克明に記録されている。それをパソコンにアップロードし、どの位置で、どう行動したか、気持ちが悪い程、空の上から見られていたような印象である。

今回つくも会にて共同購入したGPS及びパソコンソフト「カシミール」を使用した結果、次の通りの状況でしたので、次回使用時の参考になればと、メモします。

メリットとして

パソコンソフトカシミールでは、GPSヘデータをダウンロードするための、ポイント・ルートの設定が、非常に簡単である。

また、断面図、鳥瞰図等、地形の状況や山頂からの景観が簡単に事前に把握することが出来るため、登山前にコースのイメージトレーニングが可能である。

さらに、帰宅後GPSデータをパソコンにアップロードすることにより、地形図、登山道と自分の軌跡(実際に歩いた跡)の照合が簡単で、拡大をすると非常に詳細(数メートル)単位で自分のとった行動記録を捕らえることができる。

GPSは、かなりの精度(場合によっては、2~3m程度)で現在位置の表示、また、次のポイントまでの距離の表示が出来るため、雨、霧、雪等による視界不良時においても、ルートを把握することが可能であり、山中においては、非常に頼もしい存在である。

一方、気になった点は、

GPSのルート方向は、自分の位置、進行方向により、あまり正確でないので、必ずしも信用しないこと。むしろ、正確な現在位置から、コンパスと地図を併用して方向を決定した方が、無難である。

事前にカシミールのポイントとルート設定は、100~500m位に間隔を細かくしておいた方が良い。(実際に歩くと、次のポイントまでに、かなりの距離を感じる。)

意外と電池の消耗が激しい。単3の電池にて16時間程度との仕様であるが、今回ニッケル電池2本で、約8~10時間程度であった。(原因に、気温が低いこともあった。)

3日間で6本使用した。(電池がないと、ただの箱である。)多目の予備電池が必要である。

なお、日本山岳会からつくも会に割り振られたルート中、今回のコースを除き未踏査の、三国峠~稲包山~三国スキー場については、登山道が整備されているため、比較的軽装備で容易に踏査可能と思われますので、9月18日(土)~20日(月)(実際の踏査は19日のみ、その他は移動日にて、宿泊は民宿を予定)につくも会の第51回定例山行として実施したいと考えて

おります。出来るだけ多くの方と100周年記念事業に参加したいと思いますので、よろしくお
願いします。